

主を待ち望む

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-10-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 佐々木, 哲夫 メールアドレス: 所属:
URL	https://tohoku-gakuin.repo.nii.ac.jp/records/24745

「主を待ち望む」

宗 教 部 長 佐 々 木 哲 夫

詩編一三〇編一〜八節

¹都に上る歌。

深い淵の底から、主よ、あなたを呼びます。

2主よ、この声を聞き取ってください。

嘆き祈るわたしの声に耳を傾けてください。

3主よ、あなたが罪をすべて心に留められるなら

主よ、誰が耐ええましょう。

4しかし、赦しはあなたのもとにあり

人はあなたを恐れ敬うのです。

5わたしは主に望みをおき

わたしの魂は望みをおき

御言葉を待ち望みます。

6 わたしの魂は主を待ち望みます

見張りが朝を待つにもまして

見張りが朝を待つにもまして。

7 イスラエルよ、主を待ち望め。

慈しみは主のもとに

豊かな贖いも主のもとに。

8 主は、イスラエルを

すべての罪から贖ってください。

ヨハネによる福音書、第一章一四〜一八節

14 言は肉となつて、わたしたちの間に宿られた。わたしたちはその栄光を見た。それは父の独り子としての栄光であつて、恵みと真理とに満ちていた。15 ヨハネは、この方につ

いて証しをし、声を張り上げて言った。「わたしの後から来られる方は、わたしより優れている。わたしよりも先におられたからである」とわたしが言ったのは、この方のことである。」¹⁶ わたしたちは皆、この方の満ちあふれる豊かさの中から、恵みの上に、更に恵みを受けた。¹⁷ 律法はモーセを通して与えられたが、恵みと真理はイエス・キリストを通して現れたからである。¹⁸ いまだかつて、神を見た者はいない。父のふところにいる独り子である神、この方が神を示されたのである。

最初のクリスマスから既に二千年ほどの年が過ぎました。今日の私たちは、昔の時代と違って自由に聖書を読むことができます。特に、福音書を読むことでイエス・キリストの誕生を知ることができます。たとえば、羊飼いたちに現れた天の大軍、占星術の学者たちの宝物、家畜小屋に寝かされた赤子、しかも、この赤子が最後に十字架につくことまで十分に承知しています。まるで、未来を見る預言者のように知ることができます。

しかし、イエス・キリスト誕生以前の人々、旧約聖書の時代の人々は、そうではありませんでした。彼らはメシアの到来を信じていたのですが、それが何時なのか、また、そのとき何が起きるのかについて知りませんでした。もっぱら関心を寄せていたことは、羊飼いや占星術の学者のことで

はなくメシア誕生の本質でした。換言するならば、クリスマスの本質的意義を一生懸命に見ていたのです。そのような旧約聖書の人物の中に本日開きました聖書の箇所、詩編一三〇編の詩人もいました。詩編一三〇編を中心に、イエス・キリスト誕生の意義についてご一緒に考えたいと思います。

*

さて、詩編一三〇編一節〜六節の部分に注目したいと思います。この部分の内容を六つに分け、それぞれに鍵となる言葉に注目しながら、階段に譬えて読んでいきたいと思えます。すなわち、最初に三つの階段を下がるように読み、それから三段上がるように読むという組み立てです。

まず一段目です。この段の鍵となる言葉は一節の「深い淵の底」です。「深い淵の底」という表現は、「海の底」や「沼の底」の意味で使われる表現で、恐らく光も届かない深い場所だと推測されます。心の奥底を暗示しているようです。真つ暗な心の底から「主よ」と叫んでいる詩人の姿が連想されます。

さらに一段下がると第二段目の鍵となる言葉が現れてきます。二節の「嘆き祈るわたしの声」です。「嘆き祈る」は、ただ祈るのではなく、なりふり構わず懇願する祈り、嘆願の叫びです。詩人は、「私の声を聞いてくれ」「あなたの耳をそばだててくれ」と叫んでいます。なぜそれほどに、

詩人は切羽詰まって叫び祈っているのでしょうか。

さらに下がり三段目になると、詩人の嘆く理由がはっきりとします。鍵の言葉は罪です。「主よ、あなたが罪をすべて心に留められるなら、主よ、誰が耐ええましょう」（二節）と詩人は嘆きます。自らの罪を問題にしていたのです。ここでの罪とは、ねじ曲がった行い、裁きが必要なほどの墮落のことです。詩人は、誰も見ることでできない心の奥底にある自分の罪を見つめていたのです。そして、深い淵の底から叫ぶ者となったのです。しかし、真つ暗な闇は、真つ暗なままで広がっていませんでした。目の前にうつすらと上りの階段が浮かび上がってきたのです。詩人は、ためらわずその階段を上ります。

さて、上り階段の一段目の鍵は、赦しです。「赦しはあなたのもとにあり」（四節）と断言しています。紀元五世紀の頃ですが、自分の罪を自分の能力や努力によって消し去ることができると考えた神学者がいました。健康で能力抜群、品行方正で意志が強く、寸分の隙もない指導者だったと想像されます。彼は、功徳を積むことによって罪の赦しに参与できると考えたのです。しかし、詩編一三〇編の詩人は「罪の赦しは、主にある」と断言しています。

もう一段上ると、深い淵の暗闇の中に異なる景色が見えてきます。五節と六節の言葉、望み、そして希望です。主に望みを置き、主の言葉を待ち望むというのです。詩人は、叫び求めること

をやめ、罪を赦す主の到来を待ち望み始めます。

さらに一段のぼり三段目までくると、そこはもはや絶望の暗闇ではなく、詩人は見張り番の気持ちになります。すなわち、朝日の光が差し込むのを待つ見張り番の気持ちです。光の到来、罪の赦しの到来、それが詩人が見つめたクリスマスの本質的意義でした。

*
*

旧約聖書の人々にとって、罪をどのように贖うかは、実存的な重要問題でした。命をもって罪を贖うべきことは承知していたのですが、自分の命をもってするならば自分の存在が消えてしまいます。そこで、彼らは、牛や羊などの動物の命で贖いの儀式をおこないました。しかし、身代わりの動物では不完全です。また、そこから得られる赦しもまた不完全です。それゆえ、彼らは、繰り返し贖いの犠牲を捧げたのでした。他方、彼らは完全な赦しの実現を望みました。すなわち、罪を完全に贖うことのできるメシアの到来を待ち望んだのです。まるで、朝の光を待ち望む見張りのように待ち望んだのです。

ところで、新約聖書時代の使徒たち、既に最初のクリスマスを体験した者たちは、罪の贖いについて、詳細な言及を残してあります。例えば、使徒パウロは次のように記しました。

律法を実行することによっては、だれ一人神の前で義とされない。

律法によっては、罪の自覚しか生じない。

(ローマの信徒への手紙、第三章二〇節)

ただキリスト・イエスによる贖いの業を通して、

神の恵みにより無償で義とされるのです。

(ローマの信徒への手紙、第三章二四節)

また、使徒ペテロも記しています。

キリストは、…十字架にかかって、

自らその身にわたしたちの罪を担ってくださいました。

わたしたちが、罪に対して死んで、義によって生きるようになるためです。

(ペトロの手紙第一、第二章二四節)

彼らのはっきりと自覚していたことは、イエス・キリストの誕生が、罪を完全に贖うことので

きるメシアの到来だったということです。それをヨハネ福音書は、「言は肉となって、わたしたちの間に宿られた。…恵みと真理とに満ちていた」と表現し、また、「光は、まことの光で、世に来てすべての人を照らす」「光は暗闇の中で輝いている」と表現したのです。イエス・キリストの誕生を、暗闇の中に差し込んだ一条の光に譬えたのです。まさにそれは、見張りが目撃した朝日と重なり合う表現です。

今日、私たちは、イエス・キリスト誕生から二千年ほど後の時代に生きています。イエス・キリストの十字架だけでなく、その後の教会二千年の盛衰など多くのことを知る者となっています。しかし、イエス・キリストの誕生を祝う者の見つめるところは昔も今も変わらずただ一点です。それは、恵みと真理とに満ちたまことの光の到来、罪を消し去る救い主イエス・キリストの到来という一点です。今年のクリスマスに、私たちもまたその一点に集中しつつお祝いしたいと思います。